秀石書畫十三

ヲ g
585
9.

門 ヲ
索 535
巻 9

帝国図書館蔵
四丁目

木川十組香私記

蔵香舎春龍著

亟試十炷香

香数四種一三色二三色三三色客一色都合十色なり
一人毎に一三三客の札三枚宛十二枚にて同なり初め
出る香はいつにても一の札と打二度目に出る
香一と同香と云へは一の札と打別の香となる一は
二の札を打三度目に出る香一と二との間と考一ち

二なりはそれくの札をおくかりうりと云へは
三の札をおくより三度目まて回香はたくあるもの
一二三とはたくるも一二三とはたくるも一二一
と出るともなりまた度めは一ゟ二ゟの間をかんえ入
そまくの札をおくへし一二三のかの香と
おりくはは客の札をおくまた度目より一二三客乃
香を思ひ合て一二三客のうちといつまなりと
もなりなり六七八九十まて右のとく十炷
回れいまて回香三炷宛三種品一炷別の
香あり者とくへ一の札おくる香一度のまて出さ

まは即一客なり二の札おくる香終まて出さ
れて二客なり三の札おくる香一炷まて来まて
出さまて三客なり客の札おくる香終まてお
されハ甚札客なり一二三客の札いつまも回
札二枚殘なりおまを人くの客なり札片く
よのるるなり左の記録小点ゟけやうと足
て札おやうとあるる屋り
又正傍点掛やう数くなり當流まて不用
別ゟ委記を

無試

十炷香之記

香組

一 みどり
二 くれ竹
三 追風
客 千世乃かさし

	二	三	二	一	ウ	一	三	三	二	一	
名乗 白梅	一ヽ	二ヽ	三	ウ	二	三ヽ	一	二ヽ	一ヽ	三ヽ	六
牡丹	一	一ヽ	二ヽ	三ヽ	ウヽ	三ヽ	二	一ヽ	二ヽ	三ヽ	八
盧橘	一	二	二	三	三	ウ	ウヽ	ウヽ	三	二	二
常夏	一	二	二	一	一	二	三	ウ	三	三	
黄菊	一ヽ	一	一ヽ	二	三ヽ	ウヽ	二	ウ	二	ウヽ	五
薄楓	一	一	三ヽ	二	三	ウ	三ヽ	三ヽ	二ヽ	一	四
水仙	一ヽ	二ヽ	一ヽ	三ヽ	ウヽ	三ヽ	二ヽ	三ヽ	一ヽ	三ヽ	皆
枇杷	一	二	三	一	ウヽ	二	三	一	二	三	一
呉竹	一	一	二	二	二	三	三	ウ	三	一	
老松	一ヽ	二	一ヽ	三ヽ	三	三ヽ	ウヽ	ウヽ	一ヽ	ウ	七

年号月日

於何舎

出香誰

宇治山香

香数又種一二色 我房ハ二二色 みやこのたつミ二色
志りそもむ四二色 世とう宇治山と又二色 人ハ山ふなり
此内一色完又色試なり 又一色完又色なり 香なり
試又色終て本香又色の内一色抜出し 殘四色ハ
炷出し 手記録と用 為法燭内ハ二点二人
以上ハ一点なり
此組香ハ一種内と以て作共のたくめる所
感一別了 香紀を

宇治山香之記 香組

又ハ房ハ 殘の香
一 みやこのたつミ
二 志りそもむ 故山と
三 世とうちふと 本山と
四 人ハ山なり 又 月新

みやこのたつミ

名乗

月 世とうちふと

月 みやこのたつミ

月 志りそもむ

月 わう房ハ

月 人ハ山なり

月　みやたのあけぼの
月　あいたく雲

年号月日　　柱何舎
　　出香淮

小草香

香数或三種あるひは四種五種もある数をらを
草の名乃字数よりはじめ（ハきくやうと
組とき（ハ香数三種なりきの香二色やの香二色らの
香二色数合七色の内一種と一色充二色試なり四色等
なり香なり同やうハ試給く本香炉を試よりひ
合て多記添へ添出をなり記録点法左の記
要ハ別る記を

草の名

春　なりか　たんぽ　ぜんくさ
夏　ちやくやく　ちちはを
秋　きくやう　ききく
冬　きんさん　かんきく　ちりはなる

小草香之記

やうきき　　香組（きやう）　き 秋の色　や 胡蝶　う 玉鉾

名乗　やしきし　皆
同　きしやき　二
同　やしきし　皆
同　うやきし
同　ききやう　二

於何舎
出香雅

小鳥香

香数又種一二色　二二色　三二色　四二色　又二色いつとも試なり
一二三四又を一色宛交て又一三三四又と一色ゝ交て
又色宛左右ゝ分置右の方いつれすても一色とりて
左の方一色と云留右すても左すてもたるなり古式
炷は左炷ゝ又左を炷は右ゝ色炷るなりゝ記録

一図点法宇治山香のこと

香の名

一二同香　ちとり

二三同香　ほとときす

三ウ同香　いしたき

ウ又同香　あ紙しく

一三同香　きせきまい

一ウ同香　く続はくこ

一又同香　うしろぬり

二ウ同香　むとめとや

二又同香　かからひい

三又同香　何さりとり

各別香　よふこ鳥

左の記録のことき八一二同香なるゆへちとり也
又二又同香なれハかりかねハ一ウ同香なれハ
くろはくみなりたる名取るゆへいつまとい
つきりけるとふすはくまされ其ことき出
香又維のうちの同香ハ香の名の同字とむき
合てよ記録を読出すへしいつまても小香
の名十一よ変化するなり

小鳥香之記

ちちとり

香組

一 峯の雪
二 埋木
三 冥土
四 ちちとり
又 あけぼの

名乗

本とき風
同 乳ちぶり
同 いしぶき
同 乳ちとり
同 かしら雪
同 あけぼし
同 ちかいらむハ

年号月日

於何舎
出香誰

香数又稜香又色苑都合二十又色より交て二十色
に陰て只又色炬ぶ伝より出やうの変化するもの

又十二となる出香と又始より別香とさけハ帚木の
圖と書出て又一二回香三四又別香と中ハ空蟬の巻
と手出て其かなれハこれを準て知一一記録別る
なり始ハ[illegible]る下ハ玉の字を出一二三数ハ[illegible]り
[illegible]る下ハ[illegible]数を出あ[illegible]
正傍等の点掛やう又是あり別ハ多記

源氏香の圖

帚木　空蟬　夕顔

若紫　末摘花　紅葉賀

花宴　葵　榊

花散里　須磨　明石

澪標　蓬生　関屋

絵合　松風　薄雲

朝顔　乙女　玉鬘

初音　胡蝶　蛍
常夏　篝火　野分
行幸　蘭　桂木
梅枝　藤裏葉　若菜上
若菜下　柏木　横笛
玲瓏　夕霧　御法
幻　白宮　紅梅
竹川　橋姫　椎本
総角　早蕨　宿木
東屋　浮舟　蜻蛉
手習

初相童と終義の浮橋とを除て五十二の表目を
ろりて香の図の名となるなり

源氏香之記

二一三一三

名乗

とゝめ　三
たき衛　玉
かゝり火　三
まつを　一

香組

一　思ひ川
二　風乃流て
三　こゝのひま
四　をもろ
五　安藤

月　四
月　四

こゝあいせ　二
てゝよ

年号月日

於何舎
出香誰

花月香

香数六種花一二色　花二二色　花三二色　月一二色　月二二色
月三二色　以内いつもの一色　花六色　試りて又一色　花六
色香ゆゑ花方月方とゝもに花方の上座

八番元の方より始まる又月方の上座を番
元より始まる右の方をはかりれを通試
除て右番中やう八試まるひ合てれ右なり右八
番元二人まて始まるとも番流まて八一人まて始
なり先花一の試を始まる花方の上座へ花一の試
といまる出し月方の中程まてまりし内花二の試と
始まる花方の上座へ花二の試とまて出し花一の試月方
より番元へ廻まる花二の試八月方の末座へ廻りまき
花一の試火末といひて花方の上座へ出し又花二の試
月方の上座より番元へ廻まる花方上座へ花二の試

火末とまて出し花一の火末八花方の上座より始
て花方末座より番元へ返を番元より花三の
試と始て花方上座へ花三の試とまて出を花二の
試火末八花方の末座より番元へ返る花三の試
八月方上座より番元へ廻まる番元八花方乃上
座へ花三試火末とまて出し次ま月一の試を始て
月方の上座へ月一の試とまて出し花三の火末八
花方末座より番元へ返る月一の試八花方の中
程まて廻りまき月二の試を始て月方の上座へ
月二の試とまて出し月一の試八花方の上座より

香元（廻来る又月方上座（月一試出来と云て
出る月二の試ハ花方上座より香元（廻来る月
方上座（月二試出来と云て出る月一試出来ハ月
方来たり香元（廻る時月三の試を始る月三
の試と云て月方上座（出る月二試出来ハ月方
来たり香元（廻る時沼薬をとりて香炉ハ
けめ脇香元（来る月三の試ハ花方上座
より香元（廻来る月三試出来と云て月方上座
（出る又月方来たり香元（廻る時沼薬を
取てけめ脇香元（来る月三て一の香炉

と云て沼薬を香元（来る事と作りてな香ゟ色の
四一色始て花方上座（出る次ハ札筒と出る花方
より守て月方まて札打回る始香炉花方の三
人組（まり初ル又な香一色始て花方の上座（
出る次ハ二の初居と出る一始の香炉月方乃上座
より香元（廻来ると札筒の札ハ一の折居（縁
な香一色始て花方上座（出て札筒と出る二度目
の香炉月方上座より香元（めくり来ると沼薬
と香久三度目の香炉香元（廻来る此な香を
始て月方上座（出る月方三人ゟ（廻初ときゝ

かゝる時は又月方上方へ出し一星及月の香炉花
方の上方より香元へ廻事有又かゝる時は月
方上方へ出て有り香炉花方ゟ月の香へハ何の札打ても是有り月試ハ火
事と不同也有り但一二三番ハ一点
花の香とよく少あと事一有り
花一二三番ハ二点獨少ハ三点
花一と花二三と少花二と花一三と少花三と花
一二と少ハ一星
花一二三と月一二三と少と二星

月方ゟ花の香へ何の札打ても是有り花試ハ火
事と不少也有り但花一二三番ハ一点
月の香と能きく事事一有り
月一二三番ハ二点獨少ハ三点
月一と月二三と同月二と月一三と少月三と月一
二と少ハ一星
月一二三と花一二三と少ハ二星
記録点星おりて花方月方の点数と星数とを
かゝへ何方勝或ハ持と書星多付きとも点多付
き勝と一点と一星ゟて引残の点数ゟて勝

持と云る也なり又点多と勝と定る法もあり當流
にて不用又字の下ふ点罪の数と書たる記録
と又合点
花月六色字経と記録点数もなくあり勝持消も
濤て以後六色の炷末と元のごとく色てかふ彩く
客一色加へて七色よく交て一色炷なりあきと追
かと字といふ客出るなり稀なり多ハ六色炷末
の内出るなり炷末なれハ一服字知ることなり
組香むつかしく事なりなく工めるなり香響
古の半あるハなりとて

追かのごとく組香ハ限りハなくとも人なり
なれとも當流義にてハ組香限條
組香ハ不用
追加点の事 炷末六色のあるハ一点獨字
二点不當ハ量なり
炷末と客と字客と炷末と字ハ一量
客當ハ二点獨字ハ三点なり
点掛やう香式等委別て記

花月香之部

花三 花一 月三 月一 花二 月二 追加 花三

香組

花一 糸桜
花二 北遠
花三 下行ち
月一 松陰
月二 老い
月三 夕栄
追加客 京良紅

花方

名桜 白梅 花二 花三 月三 月一 点三 星三 月二
曰 牡丹 花三 花一 月一 月二 花三 月三 点六 花三
曰 若竹 月三 月一 花三 花一 月二 花二 星六 花一

月方 勝

名桜 菊 花三 花一 月三 月一 花三 月二 点九 花三
曰 紅葉 花一 花二 花三 月一 月三 点二 星三 月三
曰 雪松 花一 花一 月二 月三 花三 月一 星三 ウ

年号月日

於何舍

名所香

香数四種一口色 二口色 三口色 四口色 五口一色

客一色試ル 組合ル香十色ス

客とおなし 盤の拍子ハ経ハ又

十月中より一月廣き所あり合て十一月ル

楼又ハ楓又ハ竹ハ吉野方 龍田方とわ

吉野方ハ楼と人数ル 経の場へ立て下へ人々の

客の札と一枚宛ル 龍田方も楓と人数ル

一行の内ハ左右へ向ひ 遠く立て下へ客の札と

とを吉野方のしるし 紙巻ハ出し

札筒ハ元一廻ハ先札筒の札と共記弥一写

次ハ本ハ客と記し 書はるり へ点掛経のとの札の前へ

楼楓ハ高ハ色ハ客軍へ さし札ハ折帋へ入 尚ハ客人ハ

客ハ尚時高ハ数ハ高ハ 花楓ハ運ハ花言葉色

楓方ハ中ハ 中ハ 中ハ一間花ハ

て進ハ高ハ 中ハ 中ハ

次ハ一数ハ ハ ハ

入ハ ハ ハ 中ハ

次ハ ハ ハ 中ハ

不書ハ一切なりの扶ようの記録ハ古のごと
一二三のわりハ一点一間宛進む但一人宇ハ二
間ともむ客の書ハ二点二間ともむ一人宇ハ右に二
点右二点三間ともむ香炉絵ハ花方楓方梅方数
段勝ともに持ともに徳ともに
記録宇数皆書きく盤の反を物遅ひやう
のごと別ち条記ども

名所香之記

香組

一 うて丸
二 森陰
三 いわ一人
客 文枝

	名乗	白梅	牡丹	吳竹	竜田方	芳野方	持
三	三	三	三	一	三	三	九点
二	一	一	二	三	二	一	皆十点
一	二	二	二	二	一	一	四点
一	二	一	一	二	三	三	
三	三	三	三	三	三	三	
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	
一	一	一	一	一	一	一	
二	二	二	二	二	二	二	
三	三	三	三	三	三	三	

名乘 英菊 三乀 二乀 二乀 一乀 一乀 三乀 ウ乀 一乀 三 九点

同 糸薄 三乀 二乀 二乀 一乀 一乀 三乀 ウ乀 三 二乀 九点

同 老松 二 二乀 二乀 一乀 一乀 三乀 一 三 三乀 六点

年号月日 於何舎

出香誰

競馬香

香数四種 一ノ包 二ノ包 三ノ包 客ノ包 試内一包宛試あり

本香十二包よく交いつれまても二包取除残十包を

焚なり札を用一焚宛なり盤二ツ馬二疋人形二ツ

まつ楓一本なり盤の間連中十人のときハ二十又

間八人の時ハ二十間六人以下ハ十又間用ゆ楓を立る

但赤方へ立るなり楓を越ると勝とするなり守

やうハ右試十炷香のごとくなりたし十二包の内二包

取除られはあまりてし客二焚とも出るのもあり

又ハ一焚二焚出るもあり或一二三のうちにて二焚

残るのもありよく心を付べき也一説ニハ

先出るを絶まて香のかはりとし

ふ絶なり赤方の馬ハ赤方の守数程盤の上をを

すむ黒方もこれを同じく一人ずつ三間花籠を又引
おくるとこれ人形馬ゆりてあをを歩行は附
一人ずつありても三間花籠を同じくなれば又るを
記録ハ赤方を初る書後ハ黒方をなり秀絵
て赤方ずつ何程とうを人勝しも
拍子をなり左の記録を又人
十二色の内二色ゆり隠くる赤方を初るを
楓木右ゆ立るゆ賀茂競る赤ゆ黒ゆ帰り
ゆるゆる番記を

競馬香之記

香組

一 色ひ路
二 まを坂
三 ゆ附日
客 彩樹

名来
日 盧橘 二 三 一 一 ウ 七
日 常夏 二 ウ 二 三 一 一 三 ウ ウ 一 ゆ
日 若竹 二 一 三 ウ 一 又

二 ウ 二 三 一 一 三 ウ ウ 一
赤方

名乗　黒方　勝

同　黄菊　二　三一　ウウ一　七

同　紅葉　ウ二　三一一三ウウ一　九

老松　二ウ二三　一三ウウ　八

年号月日　於何舎

出香誰

矢數香

香数只稱一口色　二口色　三口色　客口色　以円一色宛試なり

残十二色皆本香なり札を用盛物一物宛なり

本香十二色なれば銀葉も基の傍より二ツ並置

なり試の香数終り本香一物宛て本香成

記録に志るし香色と當番へ出し札を宛て

當るごとに記録へ出る而出る紀なり初盤

の端へ人数紙矢を立て高下あるべし

扨矢数一万片なるこのところ矢し

口授ありて札十二枚用ゐる少人は初めあり一札ハ香盆
と出し一香を入廻し一香を元へ戻る紀記録へ
去る一孫く盤のよる並べき矢の去るとも
二度目の札ハ筒を出し一紀録へ写く後る二乃
打居へ入盆三度目の札ハ三の折居と出て四度
目ハ筒又度目を折居と出すなり六七八九十も
筒打居く出なり一の打居ハ十一度目を盆
十二度目の札と入十三度札筒を盆なり一人中ハ
三間花盤上六間目より矢筈を根の麈と作て
進む十一間目より打ハ令の麈とは七十二始皆中の矢ハ
盤の上向の端まて十六乃至もむなり盤ハ十約
又十六間第四又間ハ朱中四又間を根朱六間を
令四なり紀録語やう競る香のなり左右の
別なきを遠はなりなり一方より進相なきを
少人は勝持とはくるおなり十二始皆中の矢
を変の字と書なり十二始皆中の矢
十二色の事盤十六乃至十二始皆中ハ
十六間進む事令紀麈の事変と出る事
乃紀録

箭數香之記

香組　一　羅國
二　昭君
三　客　蘭の琴

一　二　三　三　ウ　ウ　一　三　一　二　ウ　一

名聚
白梅　一　二　三　ウ　二　二　一　ヒ
同
常夏　二　三　ウ　一　二　ウ　六
同
黃菊　一　二　三　ソ　ウ　二　三　一　二　ウ　一　ま

同
水仙　一　三　ウ　ウ　二　一　二　七
同
墨竹　三　ウ　二　ウ　一　又

年号月日

於何舍
出香誰

連環香

諸式傳事ハ初心軍ヨハ手やすく ゆるす
ものもとゆるす先師の授すて組香乃秘

義貞一の伝授とて此組香に記せるを
とゝに道とゝむの志をはゝのこなり

寶暦十二年壬午歳臘月望日

此本ハ前板なれども名所矢数の
文脈少し違ひあるにより再板
せるを書肆横村氏失ひぬるを
前板のたゝさるを改加番して我ら
門人岡氏の義板をせんこと願ふ
にまかせて讓るものや

天明五年乙巳十一月　蔵香舎　春龍

圍探香舍

藏板

通町四丁目 蔦屋藤八